

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

山里のやすらぎ

受賞者 <sup>すげ ち いき しん こう かい</sup> 菅地域振興会

<sup>くまもと けん かみ まし き ぐん やま と ちやう</sup>  
(熊本県上益城郡山都町)

## ■ 地域の沿革と概要

山都町は、熊本県の東部に位置し、人口は約1万7千人、総面積544.83k㎡である。宮崎県五ヶ瀬町、椎葉村と県境を接し、阿蘇南外輪山から九州山地の脊梁までを町域としている。

平成17年に、旧上益城郡矢部町、清和村、旧阿蘇郡蘇陽町が合併し、今の山都町が誕生した。

標高は300mから900mで、地形的な変化に富み、多種多様な自然と先人たちの残した通潤橋を始めとする数多くの遺産や、熊本を代表する豪族である阿蘇家に関わる歴史などが受け継がれている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

菅地域は山都町の南部に位置しており、九州山地の裾野に広がる標高約400mの農村地帯である。農地は狭く生産条件不利地だが、昔から美味しい米の産地として知られている。地域の美しい景観は、平成11年に「日本の棚田百選」に選ばれている。

本地域は、交通の便が悪く、深い溪谷で町の中心部から分断されており「陸の孤島」と呼ばれていたが、菅地域振興会（昭和47年設立）の長年にわたる陳情により平成11年に「鮎の瀬大橋」が開通し、住民の生活は大きく変化した。

主な農産物は米で、他にわずかではあるが野菜、茶、椎茸、たけのこ等が栽培されている。

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	集落
地区の性格	地縁的集団
農家率 (内訳)	56.0%
	総世帯数 91戸
	総農家数 51戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 12戸
	1種兼業農家 8戸
	2種兼業農家 30戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 791ha
	耕地面積 36ha
	田 35ha
	畑 1ha
	耕地率 4.6%
	農家一戸当たり耕地面積 0.7ha

高齢化や担い手不足という課題の中、平成6年から「棚田ふれあい探訪ツアー」、平成8年から「迫田（棚田）オーナー制」、平成17年から「茶園オーナー制」を導入して地域と都市住民との交流を図り、地域の活性化や高齢者の生きがいをづくりに取り組んでいる。

なお、「迫田（棚田）オーナー制」については九州で最初に取り組んだ地域であり、農業・農村の理解促進活動、いわゆる食農教育の先駆けとなっている。

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機・背景

現在、地域のシンボルとなっている「鮎の瀬大橋」が架かる以前の菅地域は、町の中心部から緑川を挟んで深い溪谷で分断されており「陸の孤島」と呼ばれていた。そのため、条件不利的な状況からの脱却を目指し、昭和47年に地域の合意の下、生活環境の整備や対岸との架橋の陳情活動を目的とした「菅地域振興会」を設立した。

その後、「町が近くなることで逆に地域のまとまりがなくなるのでは？」という不安から、平成以降は「自分たちの地域は自分たちの手で」をモットーとした地域活性化活動の基本姿勢に変化していった。

そのような中、平成5年に念願の「鮎の瀬大橋」が着工したが、生活が便利になる期待感の一方で高齢化等が進み、このままだと田畑が荒れ放題になるという危機感や、大橋開通後に地域を訪れる都市住民の受け皿づくりを進めなければならないという課題もあった。そこで、平成6年に高知県梶原町ゆすはらちようのオーナー田の取組を視察したことをきっかけに、「手探りながら何かに取り組まなければならない」という意識が芽生え、「とにかくやってみよう」と地域でオーナー田に取り組むこととなった。

翌年の平成7年には、地域づくり実行委員会（現：地域づくり部会）を設立するとともに、振興会と地区住民の「架け橋」にしたいという意味を込めた地区の広報誌「かけはし」を月1回発行し、大橋の工事内容や振興会の活動内容を紹介して活動への理解を求めてきた。

### (2) むらづくりの推進体制

「菅地域振興会」の推進体制は、振興会会長を中心に副会長、事務局などを置き、下部組織として、地域づくり部会、老人部会、女性部会など11の部会で構成され、各地区からの代議員を入れた運営委員会を月1回開催している。

#### ア 総務部会

振興会の核として、役員会・運営委員会を月に1回開催し、振興会活動の舵取り役となっている。

役員会には、各区長が参加することで各集落の意向や連絡調整がスムーズに行われ、集落全体への活動の周知等にも役立っている。

## イ 公民館部会

住民のふれあいを基本に、集落ごとにある公民館各分館を下部組織として位置付け活動を展開している

また、地域が集まった「ふる里祭り」を立ち上げ、福祉部会と合同で「福祉ふれあいふるさと祭り」を行っている。

## ウ 地域づくり部会

むらづくり活動の中心となる部会で、女性部会と連携・協力し、棚田と茶園オーナーの受入れを行っている。

棚田オーナーには種まきから収穫までの様々な作業を指導し、茶園オーナーには茶摘みや火入れなどを指導しながら共に作業を実施している。現在の棚田オーナーは11組、茶園オーナーは14組で、棚田オーナーにはNPO法人1組も含まれている。

また、「棚田ふれあい探訪ツアー」では、毎年40名程度の参加者を受け入れ、収穫体験（稲刈り・掛け干し）、郷土料理作り体験等を実施している。

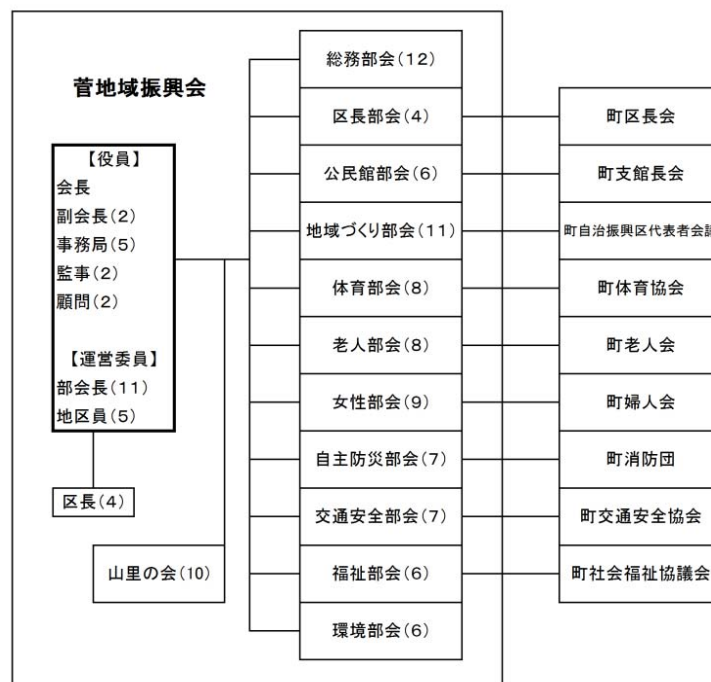
## エ 女性部会

地域内のイベントでの中心的組織であり、地域内の食文化の発信、都市住民との交流、各集落の美化運動に積極的に取り組んでいる。

「福祉ふるさと祭り」や「棚田ふれあい探訪ツアー」では、地域で収穫された食材で地域の郷土料理を提供し、参加者の好評を得ている。

その他にも、体育部会、老人部会、自主防災部会、交通安全部会等の組織が活発に活動を行っている。

第2図 むらづくり推進体制図



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

菅地域は、美しい棚田の景観が広がる自然あふれる地域であるが、一方、住民にとっては生活や生産活動において非常に不便な地域であった。このような条件不利的な状況を脱却しようと、地域合意の下で全戸が加入する「菅地域振興会」が組織された。

当初は、架橋の陳情活動が主な目的であったが、橋の開通によって地域のまとまりがなくなるのではないかと不安もあり、話し合いを重ねながら、集落の文化伝承と自然景観の保全活動、都市と農村との交流によるむらづくり活動に取り組んできた。

これらの活動により、美しい自然に囲まれた里山での生活や生産活動にも、住民自らが誇りを持ち、守り育てる活動を考え、関係機関をも巻き込んだ活動を展開している。

また、都市住民との交流を契機に、里山の人と自然と文化のすばらしさに共感した外からの応援団もでき、都市での産直活動、縁側カフェや里山レストランの開設など、新たな活動も始まっている。

### 2. 農業生産面における特徴

#### (1) 住民が一体となった生産環境の整備

鮎の瀬大橋の開通により、地域の農業生産や生活の利便性は大きく向上した。現在では、中山間地域等直接支払制度、農地・水保管理支払交付金、県営中山間地整備事業などの補助事業にも積極的に取り組み、地域住民が一体となって、水路、農道等の生産環境の整備を行っている。

また、米の栽培についても、野草を投入して環境に配慮した土づくりに努めるなど、自然環境を考えた取組も行っている。

#### (2) オーナー制度の実施による農地保全

当地域は、農地が狭く生産条件不利地であり、後継者も不足していたため、平成8年から、九州初の試みである迫田（棚田）オーナー制度の導入を始めた。平成17年度からは、茶園オーナー制度を導入し、都市住民を巻き込んだ農地の保全活動に取り組んでいる。

毎年、十数組のオーナーが誕生しており、米や茶の生産を通じて里山の維持や保全につながっている。



写真1 「茶園オーナー」による茶摘み作業

### (3) 高齢者や女性たちによる直売活動

平成11年、菅地区の玄関口に「鮎の瀬交流館」が建築され、女性グループ10名による「山里の会」が誕生し、その運営管理を行っている。

また、「交流館」の運営準備を進める中で「菅らしいものを作ろう」という取組を開始し、地域内の閉鎖された保育所跡において、不要になった調理器具を持ち寄って農産物加工所を構えている。ここでは、地域で日頃から食されている饅頭、梅のしそ漬け、コンニャク、コロッケ、カリントウなどの加工品を製造し、交流館で販売しており、この素朴な味わいは菅地区を訪れる人々に大変好評である。平成20年8月からは、棚田オーナーの協力により、熊本市内で「鮎の瀬交流館2号店」が開設され、産直活動も始まっている。

これらの活動により、これまで自家消費後の余剰野菜は、親戚等におすそ分けするのみであったが、販売を通じて現金収入ができ、お年寄りのやりがいや生きがいにもつながり、家庭菜園を拡大する人も現れている。



写真2 鮎の瀬交流館



写真3 鮎の瀬交流館2号店

## 3. 生活・環境整備面における特徴

### (1) 地域資源や地域文化等の保存・継承

平成11年に全国棚田百選に選定された「上菅の棚田」は、昔のままの農村風景を感じることができ、訪れる都市住民に「やすらぎ」を与える農村の原風景となっている。地域の案内看板や掲示板は、地元住民の手作りで、環境整備への取組も行われている。

また、平成7年に、地域内の夫婦円満、子宝の神様という言い伝えがある夫婦岩に架けられた長さ80m、重さ1.2tに及ぶ大しめ縄は、住民総出で取り組んだ活動によるもので、地域づくり活動のシンボルともなっている。



写真4 夫婦岩に架かる「大しめ縄」

## (2) 都市住民と地域住民の交流

棚田オーナー制度など、農作業体験や地域住民との交流を行うことにより、菅地域の原風景・風土にほれ込み、幾度も菅地域に足を運ぶ都市住民も増加している。そのような中、棚田オーナーの提案もあり、平成22年9月には、地域を訪れる都市住民が棚田の原風景を眺めながら憩う場を提供するため、高齢農家の女性7名を中心に「縁側カフェ」を開始した。

翌年の平成23年には、菅地域を訪れた方々に食事を提供するため、廃校となった地域内の小学校の給食室を活用して「里山レストラン」を開始し、地元で採れた米や野菜を主原料に昼食の弁当が提供されている。

「里山レストラン」を訪れた人々は、地域内の眺めの良いポイントや縁側カフェなど、自分のお気に入りの場所で食べることができる。

これらの取組により、菅地域を対外的にPRする人たちや、縁側カフェを応援する青年が誕生するなど、一人の棚田オーナーの提案から新しい交流が広がっている。



写真5 里山レストランのお弁当

## (3) 高齢者と女性のむらづくりへの参加

「鮎の瀬交流館」では、菅地域を訪れる都市住民に対して手作りの漬物やお茶などを振る舞い、来訪者に田舎へ帰ってきたような「癒し・やすらぎ」を提供している。

また、地域の野菜や農産加工品なども販売して地域経済活動の場となっているほか、都市住民との交流施設にもなっている。受入れ側の女性たちにとっては、この交流が「都会の人と野菜のことを話すのが楽しい」「自分たちが作ったものを、おいしいと喜んでもらえてうれしい」などの声が上がっており、生きがいにもつながっている。